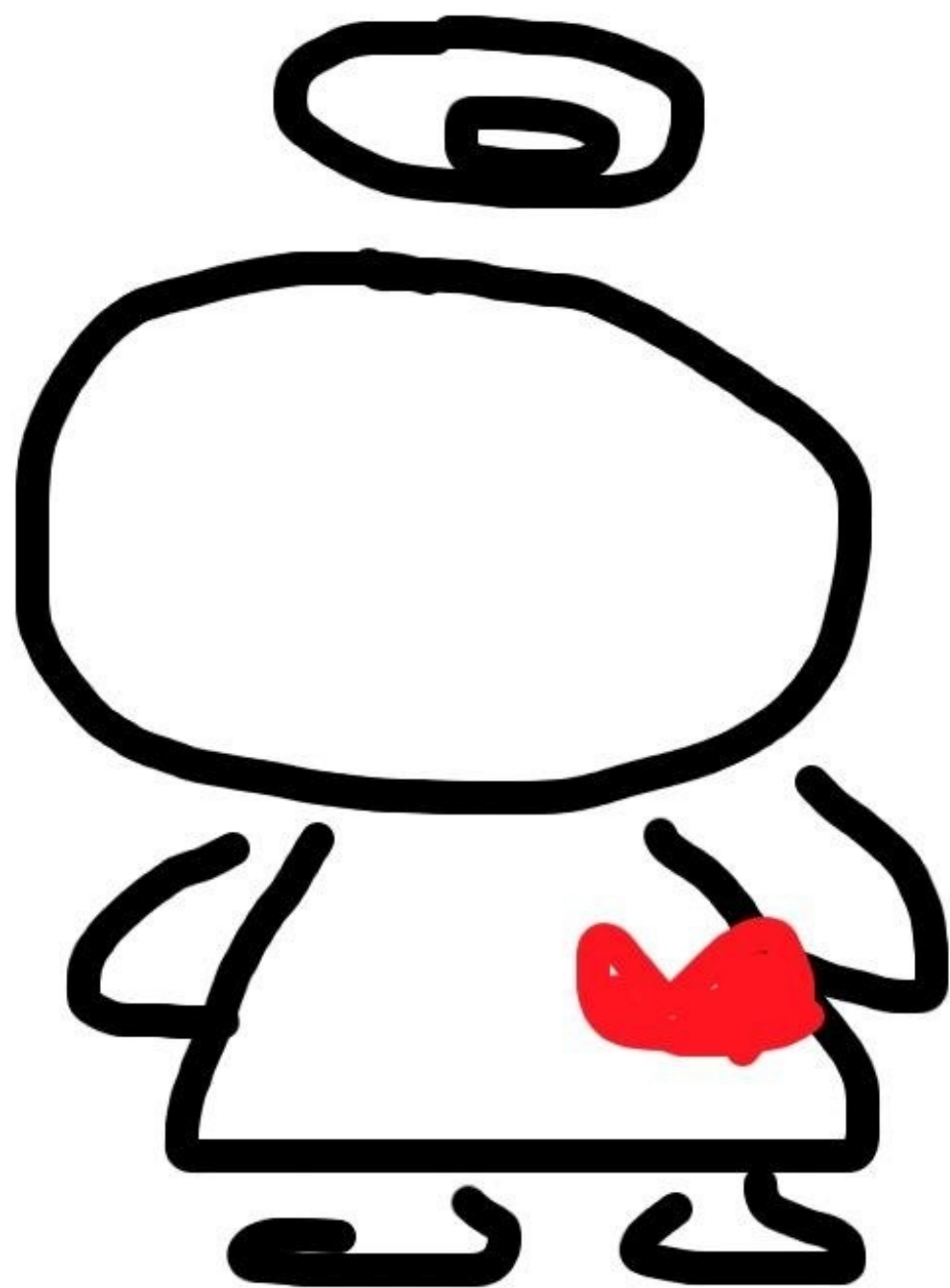


絕命小說

夜神 石



- 一、 気球
- 二、 不幸な少年、 幸福な青年
- 三、 女の会話
- 四、 シュレディンガーの猫
- 五、 デスゲーム
- 六、 あとがき

とある夏の日、A、B、C、Dの4人が気球に乗っていた。4人は夢を持って乗り込んだのだが、現実はその甘くはなく、気球は強風にあおられ、燃料も少なくなっていた。

誰かを犠牲にして少しでも多く助かるか、それともみんなと一緒に墜落するか、どちらが正しい選択肢なのか。ひとつだけ言える事は、誰も、自分が皆の為に飛び降りる気は毛頭なかった。

その結果残酷な事件は起きた。B、C、Dの3人が、一番弱そうなAを気球から突き落とすとしたのだ。結果気球は墜落から免れた。B、C、Dの3人は「Aが落ちたのは事故だと言う事にしておこう」と全員が口裏を合わせた。

そしてしばらくの時がたって、B、C、Dの3人は、「もしかしたら誰かが言いふらすかもしれない…そしたら、終わりだ」という疑心暗鬼から…なんと殺し合いを始めた。死闘の末にDだけが生き残ったが、友人3人を殺した自責の念にかられ、発狂して自殺する。

こうして誰もいなくなったかのように見えたが、実はあの時突き落とされたAは生きていた。しかしAは、落下の衝撃で記憶喪失になり、仲間から裏切られた記憶も忘れ、その後の人生を、結果、Aだけが幸福に過ごしていた…。

不幸な少年、幸福な青年

自分の事を不幸だと思っている少年がいた。彼は、自分の父親の帰りが遅い事、狭い社宅に済んでいる事、塾に行かせて貰えない事、学校が楽しくない事を嘆いていた。ある日少年は自殺した。少年が残した遺書には、家族、友人、学校に対する不満が長々と書かれていた。

別の国には自分の事を幸福だと思っている青年がいた。彼は、今日一日銃弾に当たらなかったこと、地雷を踏まなかった事、食料にありつけた事を喜んでいた。彼の両親はとっくに亡くなっていた。妹が1人いたが、昨年マラリアにかかり、「生きたい…」と言って死んでいった。

妹は生前書置きを残していた。そこには、祖国への愛と、家族や仲間への感謝の言葉が紙いっぱいに綴られていた。

ある村に、とても美しい少女がいた。彼女はなにもかも持っているように見えた。同性の友人がいない事を除いては。彼女はいつも注目を浴びていて、それが一種の憎悪のようなものを引き起こしていた。

ある日、少女は熊に襲われた。少女は他の村民に助けを求めた。
「助けてください。熊に襲われているのです。お願いします。うちに入れてください。」
美しい少女に嫉妬していた村民たちは、一斉に戸を閉め、窓を閉め、沈黙した。それによって、少女の輝かしい未来は失われてしまった。

村の女達は、少女の死を悼みすらしなかった。
「だいたいあの子、気にくわなかったのよ。ちょっと見た目がいいからってさあ、いい気になっちゃってさ、いい気味よね」
「ところであなた、私が熊に襲われたら助けるんでしょうね？」
「いやあね、決まってるじゃないの」

その会話に参加していたものが、次の日狼に襲われた。今度も村人達は助ける事をせず見殺しにした。そして女達は噂した。
「大体、あの子気にくわなかったのよ…」

シュレディンガーの猫

ある男が妻がいながら若い女性と夜な夜な逢瀬を重ねていた。毎日夜遅い男をみかねて妻が言った。

「あなた、こんな遅くまで何をやっているんです？」

男は答えた。

「さあ？人間は多くを知らない方が幸せになれるよ。」

ある日、若い女と逢っていた男が女に聞かれた。

「ねえ、奥さんてどんな人？」

男はいつも通り答えた。

「さあ、人間は多くを知らない方が幸せになれるんじゃない？」

女は少しふてくされていった。

「あなたはいつもそればかりね」

男は女に背をむけたまま言った。

「...シュレディンガー。」

唐突な言葉に女は驚いた。「はあ？」

男は言った。「シュレディンガーの猫の話、知らない？」

男は続けた。「シュレディンガーっていう人の実験の話だよ。死にかけた猫のうえに箱をかぶせると、箱をあけたら生きてるか死んでるかどっちかしかないけど、箱をあけなければ、猫が生きてるかもしれない世界と死んでるかもしれない世界が並行して存在するって話。」

「...それが、一体どうしたのよ。」女はますます機嫌をそこねた様子で聞いた。

「いや、子供の頃はその箱を躊躇せず開けたのだけど、大人になればなるほど、物事ははっきりさせない方がいい、って言い訳して、箱を開けなくなるよなあって。」男は答えた。

「難しい話はよくわからないわ。」女はベッドから出て、シャツをはおりながら言った。

「そう言えば最近無言電話がよくくるのよ。玄関のチャイムがなったから出てみても誰もいなかったり...。ひょっとして、奥さんじゃない？これも、開けなくてもいい箱かしらね。」

女房が？と男は一瞬不審に思ったが、現金なもので男はすぐに忘れた。やっかいな箱はあけなきゃいい、つらい現実はみなくていいんだよ、それが男のポリシーだった。だが事件は唐突にやってきた。

その日は男の仕事がとて遅かった。愛人の携帯に電話したが、何度かけてもでなかった。「...具合でも悪いのかな。」男は思ったが、とりあえず今日はまっすぐ家に帰る事にした。

家について男は何かおかしい、と思った。いつもなら笑顔で迎えてくれる妻が、今日はキッチンの奥に入ったままでてこない。機械の稼働音が聞こえた。

「...こんな時間に洗濯しているのか？」

「ええ。」男の妻は答えた。

なにか腑に落ちない気がしたが、男は食卓につき、作りたてのビーフシチューを口にした。

「...なにか、いつもと味が違うかい？」すごく不穏な気持ちになり男が聞いた。

「今日はめずらしいお肉が手に入ったのよあなたが喜ぶと思って。」妻が答えた。

その時だった。テレビに、男の愛人の顔写真が大きく写った。テロップが流れた。

「一人暮らしのOL、惨殺死体で発見。死体の一部は発見されず」。

「.....！！！！」男の中で、すべての辻褄があった。妻は言った。

「罰があたったのよ...あんな女...」

男は立ち上がって言った。

「お前か...お前なのか！！このビーフシチューの肉はなんだ！！その冷蔵庫には何が入っているんだ！！」

冷蔵庫を開けようとした男を制止して、男の妻は言った。

「人間はね、多くを知らないほうが幸せになれるのよ...」

ある4人の少年が拉致された。目を覚ますと、銃をかまえた一人の男が立っていた。

「お前らの中から一人、いない人間を選べ。さもなくば、おまえらを全員殺す」男は言った。

しばらくの沈黙があったのち、一番気の弱そうな少年が一步前にでていった。

「僕がいないです。僕は頭も悪いし、いつもみんなの足をひっぱってばかりだから。」

それを聞いた残りの少年たちが口を揃えて言った。

「そうだ、お前がいない」

「俺もそう思う」

「決まりだな」

すると男は名乗りでた少年ではなく、残りの少年たちをみんな銃殺した。

「いない人を殺すとは一言も言ってないよ？」

呆然としている生き残った少年に対して男は言った。

「おめでとう。君はゲームに勝った。これからの人生を好きに生きるといい。」

絶命ビリー

俺の名はビリー。職業、殺し屋。呼ばれ方なんかどうでもいいのだが、裏では「絶命ビリー」と呼ばれているらしい。

そんな俺も今年で32になる。当然、結婚はしてない。この職業なら幸せな家庭生活なぞ望めないからな。

だが俺は、同じ組織のモリーに密かに愛情を抱いていた。美人だが、血生臭い女さ。まあ、人の事はいえないがね。

そいつがどうしたもんか、ある日、俺にデートの誘いをしてきたんだ。そりゃ舞い上がったさ。当日、誘われた店で

モリーと話をしても内容なんか頭にはいって来ず、ひたすら、あの美しい唇が言葉を話すのをうっとり見てたのさ。

ところが、だ。モリーの奴はその帰り、俺に銃口を向けてきたんだ。

「次はあなたがターゲットだったのよビリー。騙しててごめんなさいね。さよなら、今日は楽しかったわ。」

そう言ってモリーが俺に引き金を引こうとした瞬間、俺は向こうのビルの屋上から人影が動くのを見た。

「モリー、あぶない！！」

次の瞬間俺はモリーを抱えて地面に伏せた。俺たちが立っていた壁には弾痕がうっすらと煙をあげていた。

「どうしてこんな...。」モリーの唇は震えていた。

「どうやら、組織は俺たちを消したがつているようだな。」

そして俺は立ち上がり、上着やズボンについた埃を払いながら言った。

「モリー、俺と逃げるか？」

モリーは驚いて言った。

「どうして...私はあなたを殺そうとしたのよ？」

「あんたみたいな美人なら、一度殺されてみたいなの思っていたもんでね」

俺は笑っていった。

「...ずーっとずーっと、追い回されながら生活するかもよ？」

「もともと、俺たちの未来に希望なんてないさ。それなら、一人より二人のほうがずっといいだろう？」

「それもそうね。」

翌日、俺たちは偽装パスポートで国外に逃亡した。

どもども。はじめましての人ははじめまして。まいどの人はまいど。夜神石です。普段は夜神右というハンドルで歌を歌ったり、まあ、いろんな事やっています。

この度、Twitterで前々から発表していた小説を、電子書籍というまた違った形で発表できるようになりました。素人で、それまでロクに執筆活動なんかした事がない自分からしたら快挙です。

最初「愛だ友情だぬかしたところで、あんたら、気球に乗ってて落ちそうになったらどーせ誰か突き落とすんでしょ？」というおいらのヒネクレた妄想が、「いや…これ小説にしたら面白いんじゃないかね？」という発想に変わり、素人ながら一生懸命グロテスクな小説として妄想を形にしました。登場人物に名前すらついてない話だった。（今でもあんまりスタンス変わってないけど）以降、書くのが面白くなって、現時点ではTwitter上に全5作の作品を発表しています。電子書籍化の話がもちあがり、パブーを紹介されたのが「女の会話」を書いていた時です。

でも「今まですでに発表した話をただまとめただけじゃ面白くないなー」と思って、「絶命ピリー」を書き下ろしとして追加しました。結果、最後にちょっと救いのある話になってよかったんじゃないかと。絶命してないけど。

電子書籍化、「え？どーやんのどーやんの？」って感じで大変だったけど、なんとか無事にできてよかったです。今度は「絶倫小説」ってタイトルでポルノ小説でも書くかな。いや嘘だけど。

夜神石（またの名を夜神右）

絶命小説

<http://p.booklog.jp/book/12440>

著者：夜神石

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yagamiright/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/12440>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/12440>